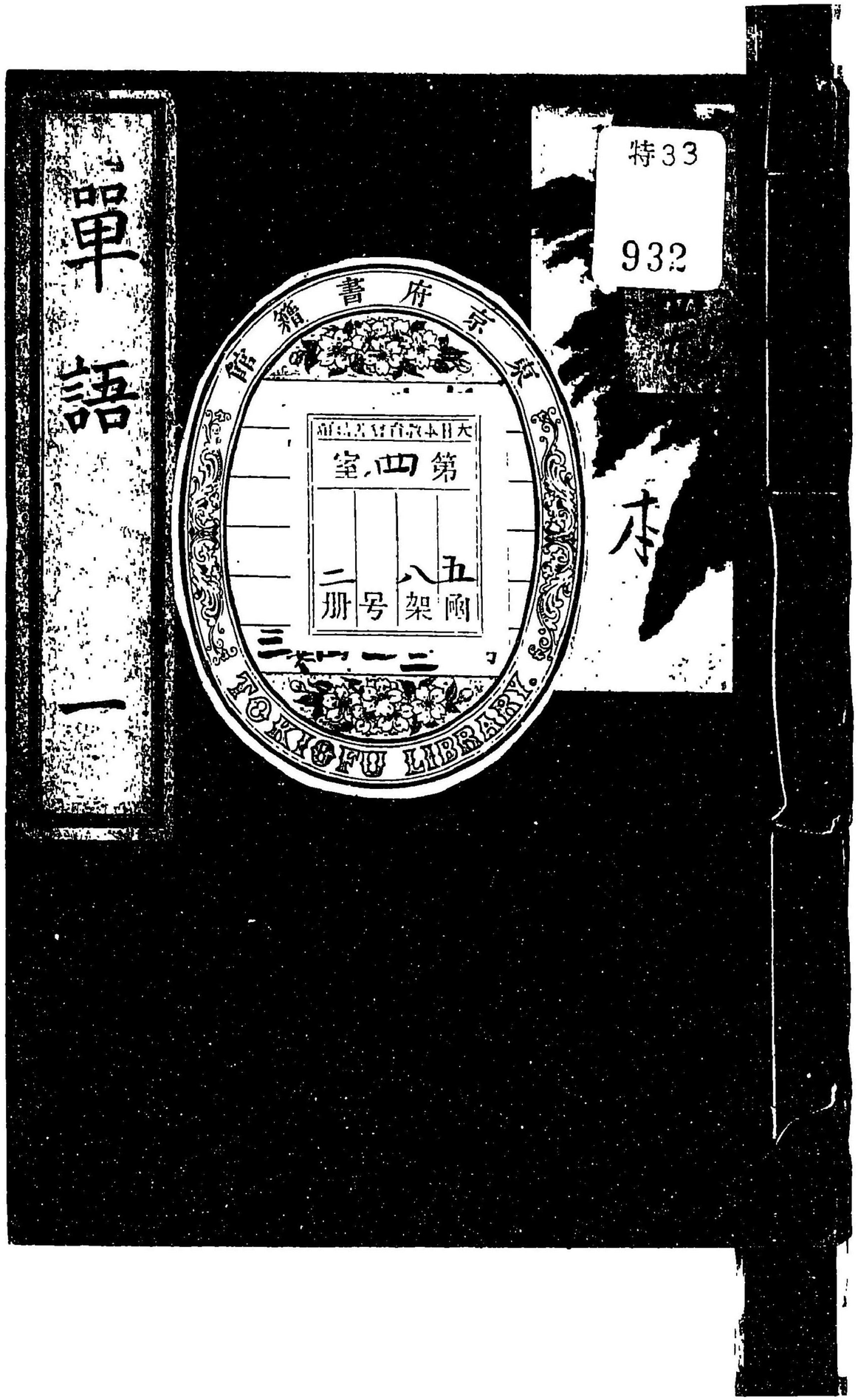


077913-001-2

特33-932

単語

秋田県太平学校

M1 1

DAC-1378

明治七年第四月

單語

秋田縣學校

特33
932

單語第一篇

天　日　月　星　風　雷

電　雲　雨　霖　霧　露

霜　霰　雹　氷　雪　晴

靄　曇　霓　蝕　暈　虹

霞　霽　空　霄　颶

日の出づるとき起きて學み就くべー
月ハ小さき星みて日の光を受て光るかり
星の多く聚りたるを銀河と云ふ
雲ハ水の空み騰きるもの雨ハ騰りし水の降る
ものかり
霰と雹とハみな雨の凍きるものかり
霰の大かるものを雹といふ
氷ハ水の凍きるものみて水より冷かなり
雪の光りふく書を讀み貴くなりー人ありー

時春夏秋冬閏
年曉朝晝夕晩
夜昨今暖暑凉
寒

四時とハ春夏秋冬のことかり
春ハ暖かみ夏ハ暑く秋ハ凉しく冬ハ寒ー
閏の年ハ二月の末み一日を加ふ

寒さ暑さを厭ふて學びを怠たる小兒ハ愚うかる人となる

朝ハ六時ゐ起き夜ハ十時ゐ寐て休むべー

地水陸土山嶽
峯嶺巔岬峽岡
阪麓溪谷洞窟
洲嶋海洋國都

府郡縣村野原
道街徑橋市井
町里田圃畔溝
港湊濱磯浦汀
津灣境泥砂岩
潮波瀾川澤江

湖沼堤　池泉瀧

森林畷

山を作るみハ一撮の土を積て息まざるみあり
學を成もみハ分寸の光陰を惜て勉むるふあり
山の頂上を巓と云ひその尖きるを峯といふ
山と山の間を谷と云ふ
學問ハゆだんをする時ハ後へ戻ることと阪み車
を推すが如し

三府とハ東京西京大阪のことあり
良き田ありとも耕さざるバ米を得ぞ人學バざ
るバ器をふさぐ
高き處より落る水を瀧と云ひその水北流ス
を川といふ
波の上み魚が游く

家宮殿　樓閣城

廳驛邸　宅房爐

竈 廚 棚 閨 厠 窓
戸 襖 壁 柱 礎 棟
梁 榱 廡 簷 堂 椽
桁 桷 門 閫 扉 門
關 扃 店 倉 庭 塾
館 院 厩 亭 臺 欄

屋 庵 垣 屏 社 寺
壘 砦

帝のいまを處を宮といひ神のいまを處を社と
いふ
跡より来る人ゐるとさハ戸をたてさることか
れ
門を出る時も人を敬ふことを心がくべー
倉の鼠ハ米を喰ひ厠の鼠ハ糞を喰ふ

人帝后王君主
臣民士農工商
男女父母夫婦
兄弟子孫姉妹
祖姑伯叔甥姪
妻舅壻嫁嫂妾

師友僕婢醫卜
僧尼鰥寡孤獨

志の弱き者ハ男の形ありとも女の心ゐ劣さり父の子を愛をるハただこきを教るゐあり母の子を愚かゐをる病ハ愛ゐ溺るゝより生ぞ愛して教へざるハ獸の子を舐るゐ同じ子を育つることを學て後ゐ嫁せざきバ子を教ること能ハぞ

師ハ父母の如く尊び事ふべきものなり
友ハ吾より勝さる者を擇ぶべー
惡き友ハ交るべからず
僕や婢を使ふ事慈愛かさものハ人の上ゐ立つ
能ハず
女の僧を尼と云ふ

體 頭 腦 額 面 髮
眉 目 睫 瞳 鼻 耳

頰 喉 髯 口 脣 齒
牙 齦 舌 吭 腮 胷
乳 肋 腹 臍 肩 背
手 脇 肱 腕 拳 掌
指 爪 腰 臀 股 胯
足 膝 趾 髓 趺 跖

踵踝筋骨血脈
皮肉心脾肺脛
肝膽胃腎腸髓
脂屎尿

頭ハ朝朝洗ひ清むべし殊み髮ハ美くして置くべし

脳ハ精神のある處みて大切なる故人の頭をたくてとふかき

面み誠らしく見せて心みいつはりをいだくものハ罪あり

目と耳と口とハ妄りみ使ふべからず善きことみのみ用ひよ

口をつゝしめ病多くハ口より入り禍多くハ口より出づ

過て舌を動をとさハ車を以て追ふともそのことばをとり返をことあたハず

衣冠帽纓衿袂
袖鈕鈎袴帶衫
衿裨褌紐襷褌
裾襪履靴錦繒
絹練帛紬麻布
綿毛絲繡縮絽

紗衾褥

冠ハ脱せざるを禮とし帽ハ脱せるを禮とも
帶を強くしむる時ハ人身ゐ害あり
錦を著て古郷ゐ歸き裸ゐて都ゐさまやうこと
多き
麻の中ゐ生ずる蓬ハ直ぐゐ育つ正しき人のか
たはらゐ育つ小兒ハ自ら正くなる
絽と紗とハ薄き故ゐ夏の服なり

食飯粥餅汁湯
茶酒醴醪酢麹
麪粉肴鱠鮓鹽
油飴蜜糖粽糒
糧糟味甘辛
苦酸醎

味噌汁ハ人ヵ害あるもの故多くをゝるべからず

熱き湯を飲み又ハ甚だ熱き湯ヵ浴をるハ毒ヵあり

茶ハ人の心氣を新鮮ヵをるものあり

酒を飲めを人身ヵ害あり

飴を食ふヵも已をのみ喰ハを親ヵも上げ友ヵも與へよ

甘きもの伐多く食ふべからず

器紙筆墨硯書
畫曆貨札錢尺
印鏡刀劒砲銃
舟篙鞍轡鐙鞭
棹檣船艦舵櫓
帆錨纜筏

舳艫車轎薪燧
炭桶俎壺瓶膳
椀箸皿串笼盆
鉢鍋釜鑵笊篩
拌杵臼鎖鑰机
篇櫛簪盥燭燈

扇箕竿　牀席畳
簾簑笠　櫃箱嚢
繩綱綱　砥鋤鍬
鎌鑿鑢　鋸錐鉋
鉞斬鎔　鉈鋏針
釘鏤鈎　機雙管

琴　笛　盃　樽　枕　弓
箭　杖　傘

紙ハ楮の皮ゐて製ーヌ木綿或ハ藁ゐて製をるものゐる

昔ー紙の代りゐ木の葉ゐ手習ーて上手ゐかりーー人あり

心正ーき時ハ筆正ー故ゐ筆の跡ハ心の跡ゐり

書を讀むハ米を搗が如ーー米ハ搗ほど白くゐり

書ハ讀ゐど賢くゐる

小兒の時より正しさ人を鏡として已きゞ心を照せバ後ゐ人の鏡とゐるべし

帆ゐて走る舟を帆前船と云ふ

軍ゐ用る船を軍艦と云ふ

學問ハ人を貴き器さをる鎔ゐり

席ゐ坐をる時ハ人ゐ讓るを禮とを

鋏ハ鋏ゐて作り紙や切き抔を切るさ用る器ゐり

金 石 銀 銅 鋏 鉛 錫 汞 玉 鏽 鋼 朱

金ハ貴ゐきとも鋏の用多さゐ及ぞぞ

金銀銅鋏鉛錫汞を七金と稱ふ

玉琢かざきバ光りゐ一人學バざれバ智ゐし

鋼ハ鋏を鍊て作るものゐかり

朱ハ硫黄と汞よりゐる

礦を鎔せバ金屬流きて滓を止む

穀米麥粳糯粟
黍稗豆葱芋瓜
茄菜芹薺蕨薑
蓼筍蕈蕗韮蒜

米ハ五穀の中にて最も よく人身を養ふものなり

小麥の粉にてパンを製をパンを人の食とかし

て益あり

糯ハこかさ悪し多く食ふべからず

瓜や茄を多く食ふ時ハ毒とかる

初茸ハ総ての蕈に先つて生ずるものなり

総て多く食をることかさ多く食をさバ精神の働を減じ病を釀ものなり

果梅桃李杏梨
栗柿棗橙榴

梅ハ衆樹ヨリ先ツテ花咲キ其實酸キモノアリ
梨十一ヲ弟ヨリ與ヘ二ツヲ妹ヨリ與フル時ハ其與
ヘタル數ハいくつかなるや十三アリ
人ノ垣ノ内ヨリ何ナル果物ヲ取ルベカラズトテ
取ルヲ盗人アリ
棗ハ長キ果物ヲ熟スル時ハ赤キモノアリ

草木　桐　櫻　松　杉
柏　柳　檜　桑　楮　樫

樅　樺　竹　椿　楓　橡
桂　楠　菊　藤　籐　萇
艾　葛　薄　茅　荻　萩
蓮　葦　萍　蔦　根　葉
枝　花　荅　莖　芽　蘖
菫　苔

天子の御紋ハ菊の花と桐ハ葉の形ゐり
櫻の名處ハ嵐山吉野山墨陀堤ゐり
松や杉ハ常磐木とて四時共み青し
莨を多く嗜むハ毒ゐり午前よりハ寧ろ午後ゐ
吸ふべし
花の多からん事を欲せバ先づ其根を養ふべー

鳥 獸 鶴 鷺 鳳 鶩
雞 鴨 鴉 鳶 雉 鵞

鸚 鶏 鷹 鷲 鴻 鵠
鷗 鸕 燕 鵲 雀 鷸
梟 鼠 鼬 猫 犬 馬
牛 羊 豕 猪 兎 麟
鹿 狼 猿 獺 虎 象
獅 犀 熊 驢 麝 貉

狐狸 雛 卵 嘴 角 牙 翼 尾 蹄

鷲の嘴ハ箆ニ如く足の指の間ニ蹼ありて水ニ遊ぶものなり

梟の眼ハ晝見へず夜ばかり見ゆるものなり

猫ハ夜明かニ物を見て能く鼠を取る

馬ハ獸の中ニて最もよく人ニ馴き人を乗せ車を牽く

牛ハ用ニ立ちて馬ニ劣らず又其肉と乳ハ人の藥なり

兎ハ前足短かく後足長し故ニ山ニ登るニ速く降るニ遲し

鹿ハ食物を得るときハ必ずその友を呼ぶ

獅吼るときハ百獸懾き伏を然きとも人の智ニ及ぶざるが故ニ人ニ制せらる

卵ハ取るべからず取るときハ親鳥の悲むこと人の親の心と同じ

魚蟲介
鯛鯉鱸
鮒蟹蝦
鮭鱒鮎
鯵鰌鰈
鯖鰺鰯
鯨鯉鮫
鰤鰹鮟
鰻鮹鯔
鰌蛇鼈
鮑鮒
蛤

蜆螺蠣鱗鰭甲
蠶蝗蠅蚤蝨蚊
虻蛙蟇蟻蛆蟲
螢蝶蜂蟬蚓

鱒ハ網み入るとき静みして慮を伺ふ故ふよく網を脱れ人も狼狽(ざわ)るとさハ危難を免ゝ法鰌ハ驚き騒ぐ故み網を脱する能ハず

鯨ハ魚の中みを最も大なるものみて人其油と肉を取て用み供ふ

蛇ハ長き虫みて人を噛む

鰻ハ長き川魚みてその味美ー

鼈の甲ハ貴きものみて櫛や笄杯を製るみ用るものあり

蚕ハ桑の葉のみを喰て活るものあり

度々湯み入り着物を著かへて蚤の生ぜぬ様みをべー

蚊ハ針の如く長き喙みて人肌血を吸ふその性烟を嫌ふ

昔螢を集めて燈とおー其光みて書を讀みー人あり

蜂ハ尾みへをさを刺を持つさをども仇をおさざれバさすことをー

方東西南北乾

坤巽艮前後左

右　上　中　下

日の出る方ゟ向て立てバ前ハ東右ハ南左ハ北
後ろハ西ゟ至
北と西の間ハ乾ゟ西と南の間ハ坤ゟり
南と東の間ハ巽ゟ東と北の間ハ艮ゟり

度　丈　尺　寸　分　釐
毛

丈の十分一を尺尺の十分一を寸と云ふ
毛の十倍を釐釐の十倍を分分の十倍を寸と云
ふ

量　斛　斗　升　合　勺
抄　撮　圭

十撮を抄といひ十抄を勺と云ふ
十勺を合といひ十合を升と云ふ
十升を斗といひ十十斗を斛と云ふ

衡 貫 匁 分 釐 毛

毛積で釐とふり釐積で分とふる
分積で匁とふり匁積で貫とふる
總て十倍みふる毎み名が變ずるふり

圓 錢 釐 毛 絲 忽

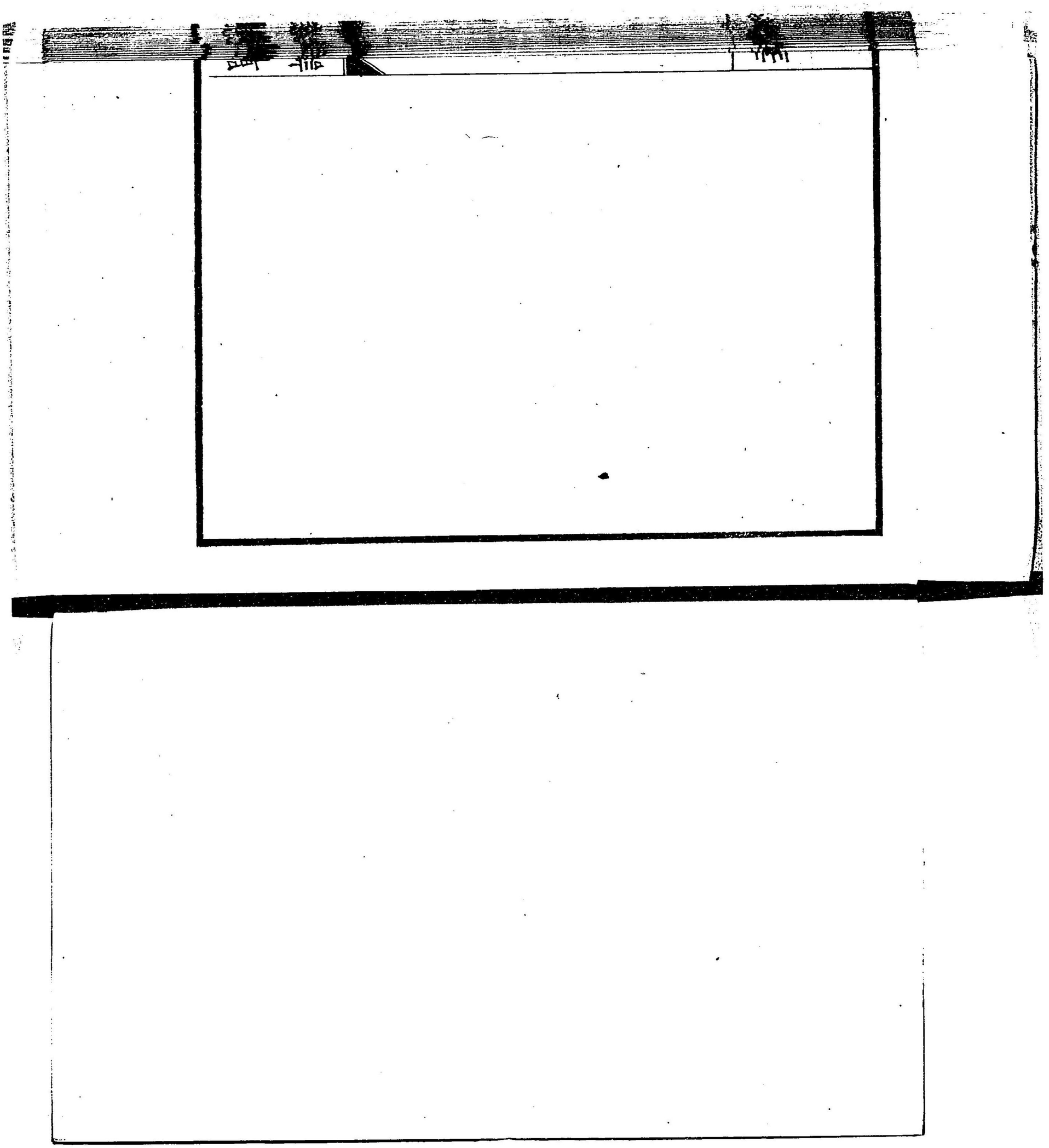
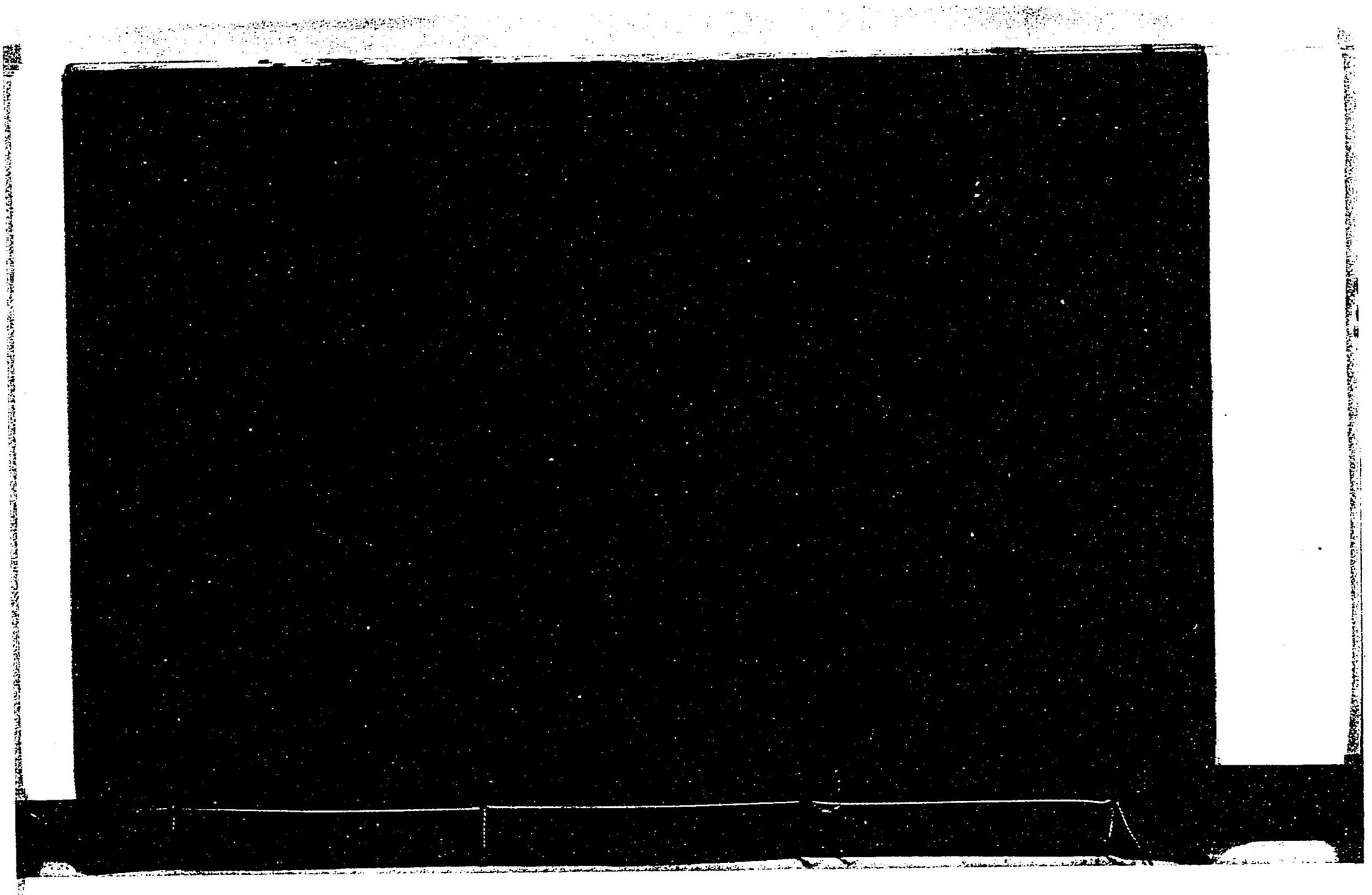
微

圓の百分一ハ錢みて錢の十分一ハ釐ふり
總て十分一みふる毎て名が變ずきども圓でか
りハ百み分ちて錢とふる

親 義 別 序 信 忠

恕 孝 悌 誠 敬 仁

親子の間ハ親みを致すを第一の道とす
君み事るみハ義を盡して利を見ることなかれ
夫婦の間ハ禮の別を知るべし

長幼の序ハ押さたりとも失ふべからず
言と行と違ふことなかゝ實を盡すを信といゝ
人のおとをも我がことのごとく真切を盡すハ
忠なり
己が欲するおとを人ゐ施し己が欲せざることを人ゐ施さゞるハ恕あり
道を守り親ゐ事ふるハ孝あり
長者ゐ遜讓して理を失ふハざるハ悌あり
火の熱く水の冷うかるごとく偽り欺くことか
く天理ゐ順ふを誠と云ふ
一心ゐ天の道を主とし畏き勉るハ敬なり
人を慈愛し天ゐ協ふものハ仁あり

單語第一篇終